The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大岡昇平文学における体験と創造 一戦争小説を中心にして一
Author(s)	林, 姿瑩
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/72430
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　LIN TZUYING　）	
論文題名	大岡昇平文学における体験と創造 ―戦争小説を中心にして―

論文内容の要旨

本論文は、戦後一躍文壇に名を上げた大岡昇平（1909-88）が、いかに自分の戦争体験及びそれまで培ってきた文学的教養を小説の創作に活かしたのかという点に着目し、大岡の初期戦争小説『俘虜記』、『野火』、短編戦争小説群を分析対象として、その創作方法及び創作意図を考察するものである。また、この戦争体験を通して生まれた〈創造力〉が、後の大岡文学にどのように継承され、発揮されたのかという点も問うにあたり、生死に関わる異常な状況という面で戦争小説と共通する、推理・裁判小説の検討も行う。

徴兵前の大岡は、スタンダールの翻訳者・研究者として知られていただけで、特に文名を成してはいなかった。1944年3月という戦争末期に補充兵として召集され、1945年1月にフィリピン前線で米兵の俘虜となり、同年12月に帰還した。大岡は俘虜になるまでの24時間という自らの体験を描いた「俘虜記」（1948.2）をもって、小説家として脚光を浴びたのである。何故、大岡は一介の無名作家から、一躍してその名を知らしめることになったのであろうか。その理由が彼の〈戦争体験〉にあるということは明らかであろう。先行研究においては、大岡の戦争体験と戦争小説の〈距離〉の問題や、対象への正確な認識及び真実への接近という『俘虜記』の創作方法、幻想性の高い描写という『野火』の特徴などが指摘されてきた。しかし、これらの論考は、大岡の戦争体験に対する正確な捉え方に着目したり、体験を作品の素材として取り上げて論じるなどの傾向が見受けられ、大岡の戦争体験がどのように作品の成立に関わり、いかにして物語世界を構築したのかという課題は残されている。本論文では、これらの先行研究の蓄積を踏まえて、大岡がどのように自分の戦争体験を作品化したのかという問題を提起し、外国文学の素養の活かし方も考慮に入れ、大岡の戦争小説における創作方法の解明を試みる。

本論は、全四章によって構成される。

第一章では、合本『俘虜記』（1952.12）で主人公の戦争体験及び堕落していく俘虜の描写に着目し、何故俘虜の堕落を描くのに12編もの連作を発表しなければならないのかという問題を念頭に置き、大岡が自分の戦場・俘虜体験を活かして『俘虜記』を創作した時の意図と方法を考察する。まず、『俘虜記』の構造を分析し、その根幹には大岡が戦争体験から獲得した〈認識〉及び〈思惟方法〉があり、それに基づいて真の人間の堕落とは何かを突き詰めていくというプロセスがその骨組みであることを明らかにした。大岡は戦場における個人の「決意」と「行為」の非干渉性／不連続性という〈認識〉を提示した。次に米兵と日本兵そして日本人俘虜の間に、戦争の介在によって決定づけられる関係性を見出し、個人の「行為」に対する「環境」の決定力という〈認識〉を示した。この〈認識〉によって、戦時中の俘虜が堕落した原因は収容所という「環境」の問題であり、終戦後の俘虜の堕落は収容所の問題ではなく、彼等自身の態度に起因していることが示唆されている。ここから、『俘虜記』を通して大岡が批判しようとした俘虜の「堕落」とは、「俘虜」という屈辱的な立場になったにもかかわらず、米軍に甘やかされて、終戦後も依然として無反省であった態度を指していることを明らかにした。これらを踏まえ、戦場体験と俘虜経験を通して大岡が持つようになった問題意識及び〈認識〉は、合本『俘虜記』に結晶し、その問題意識に向き合うという文体、つまり〈認識〉を提示してそれを様々な問題に応用及び論証していくという書き方には、『俘虜記』の独自性があると指摘した。

第二章では、『俘虜記』との方法上の違いを念頭に置いて、戦争体験をもとにして書き上げられたフィクションである『野火』の成立や創作方法を考察する。『野火』にはエドガー・アラン・ポー（Edgar Allan Poe, 1809-49）からの「借用が沢山あります」という大岡自身の発言を踏まえて、何故戦争小説を創作する時ポー文学を手本にしたのか、その借用は表面的なものなのか、或いは『野火』の成立において不可欠なのかといった問題を考察し、『野火』におけるポー文学の受容を具体的に検討する。まず、大岡が『野火』という虚構性の高い世界を構築する際に、ポー文学から借用したモチーフを作品の骨組みにして、それに自分の戦争体験という〈素材〉を肉付けしていくという創作方法がとられた点を解明した。ポー文学を手本にした理由については、ポーの文体を用いることで、戦争という異常な体験をリアルに描出し、最初から作品全体が「狂人の手記」であることを明かさずに過去の体験を現在進行形のよう

に見せることが狙いとしてあった点を指摘した。また、先行研究における解釈を修正し、『野火』とポーの作品を具体的に比較することで、モチーフを借用しつつもその機能を巧みに転換させ、原典を見事に活かした大岡の手腕を浮き彫りにした。その上で、『野火』のテクストそのものを分析することによって、聖書や讃美歌を幻聴・幻視の内容とした設定や、「神」への依存を狂気の頂点とした物語の展開には、大岡の独自性があることを論証した。大岡はポー文学のモチーフを活かしつつ、自分の戦争体験を再構築し『野火』という虚構の世界を作り上げたが、その一方、「神」の設定は大岡の戦争体験から生まれたものであることを確認できた。

第三章は、従軍記より俘虜記を書きたいと発言した大岡が、1949年2月から何故自分の従軍体験を書き出したのかという疑問から出発し、『俘虜記』『野火』とほぼ同時期に書かれた17篇の短編戦争小説を中心に、そこに描かれた体験及び作品の主題を分析する。『俘虜記』『野火』と同時期に発表されたこの一連の短編戦争小説は、大岡の出征やフィリピンでの駐屯生活、すなわち戦場体験を中心に描いている。大岡が自分の戦争体験からどのような主題を抽出し、それをいかに描いたのかという問題を考察し、その上で大岡の戦争小説におけるこれらの短編戦争小説の位置付けを検討する。まず、大岡が戦後の社会状況に目を据えながら、記録文学のあるべき書き方を一つの手本として提示しようと試み、自分の戦争体験を短編という形式で様々な雑誌に投稿したということを指摘した。その上で、短編戦争小説の主題を以下の三点にまとめた。一つ目は戦場における兵士の心理と感覚をどう捉えて表現するのかという問いとその実践、二つ目は亡くなった僚友に対する見直しと追悼、三つ目は戦争を代表とする政治的な情勢に振り回された人間同士の関係の有り様と幸福の追求である。そこで、一つの軸に沿って創作された長編小説の『俘虜記』『野火』とは異なり、短編戦争小説は様々な主題及びその書き方を試みる場として設けられていたことがわかった。これらの短編戦争小説は、当時『俘虜記』のように「合本」として打ち出されていなかったとはいえ、大岡の戦争体験及びその創作をより包括的に捉えるために、無視できない重要な作品である。それを指摘することによって、大岡の戦争小説における短編戦争小説群を位置付けた。

第四章では、大岡が戦争体験及びその創作過程から獲得した主題と方法が、異なるジャンルの文学を創作する際に、どのように援用されたのかを考察するために、生死に関わる異常な状況という面において戦争小説と近い、1955年から1962年まで継続的に発表された一連の短編推理・裁判小説を考察対象とする。これらの短編推理・裁判小説は、計21編のうちの12編がイギリス人作家による『謎の事件（*Riddle of Crime*）』（1928）の翻案または翻訳であり、それらの中には大岡によって教訓を示唆する段落が付け加えられたものがある。原典に書かれた事件、つまり他人の〈体験〉をどのように作品化するのかという問題意識に立って、『謎の事件』から翻案した推理小説「春の夜の出来事」（1955）と、同じく『謎の事件』から翻訳した裁判小説「最後の告白」（1956.6）を例にして分析した。これらの作品には共に、遺言や死者の最後の言葉に焦点を当てようとする意図があるとわかった。また、大岡が推理小説「真昼の歩行者」（1955.9）の中で、人間の二面性及びそれを持つ裁判官の問題を提起していることを指摘した。つまり、人間の告白や証言の不確かさ、また正義感／処罰欲という二面性を持つ裁判官の問題は、短編推理・裁判小説に書かれた犯罪事件の中で、大岡が最も重要視した主題であると確認できた。こうした教訓には大岡が戦争体験を通して獲得した〈認識〉が反映されており、更に人間の〈告白〉への関心には、感傷的な記録文学を批判する問題意識と、戦争体験の語り方や書き方にこだわる姿勢が通底していると指摘した。これらの検討を経て、戦争小説から継承した主題と方法を短編推理・裁判小説においても活かすという大岡の創作手法を明らかにした。

以上、本論文においては、戦前の文壇では無名だった大岡が、戦後は戦争小説をもってどのように文壇の注目を集める作家になったのかという問題から出発し、その理由を大岡の戦争体験に対する〈認識〉に求め、戦争体験に基づいて書き上げられた作品を検討してきた。作品分析や比較文学的な考察といったアプローチを通して、大岡文学における〈体験〉と〈創造〉の一側面の究明を試みた。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　林姿瑩　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	清水康次
	副 査	大阪大学　教授	北村卓
	副 査	大阪大学　准教授	橋本順光
	副 査	大阪大学　准教授	斎藤理生

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　大岡昇平文学における体験と創造
—戦争小説を中心にして—

学位申請者　林姿瑩

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　清水康次
副査　大阪大学教授　北村卓
副査　大阪大学准教授　橋本順光
副査　大阪大学准教授　斎藤理生

【論文内容の要旨】

本論文は、戦後活動を始めた大岡昇平が、自らの戦争体験をどのように小説化していったのか、またその際に西洋文学に対する知識をどのように活かしたのかという点に着目し、大岡の初期戦争小説である『俘虜記』・『野火』・短編戦争小説群という三つの系統の作品（および作品群）を分析対象として、その創作意図および創作方法を考察したものである。また、次の時期に書かれた推理・裁判小説群を検討することで、これらの作品を通して生まれた大岡の思考が継承されていくことを確認し、考察を補強するとともに、後の作品への展開を見ようとしている。

本論文は、序章と四つの章および終章からなるもので、分量は、400 字詰原稿用紙に換算して約 520 枚である。

第一章は、合本『俘虜記』にまとめられる連作を考察の対象とする。作品の第一章からの部分には、大岡が、自身の体験から獲得した認識および思考が読みとれる。それは、戦場における個人の決意と行為が不連続であるという認識であり、環境と行為とを関連づける思考である。それに続く章では、その認識と思考が他人にも応用されていき、確認されていく。戦場、野戦病院、俘虜収容所と、環境が変わるにしたがって、人間の行為は変化し、恵まれた収容所の中では堕落していく姿が批判的に描かれているとする。合本『俘虜記』の連作は、その認識と思考において連続するものであり、俘虜の堕落する姿を描き終えたところで大岡の意図が完成されたとして、作品の一貫性を読みとっている。

第二章では、同じく戦争体験に基づいてはいるが、『俘虜記』とは異なるフィクションである『野火』について、その成立や創作方法を考察している。『俘虜記』が大岡自身の認識や思考によって進行していたのに対して、『野火』はエドガー・アラン・ポーの表現を借用している。文献調査を丹念に積み上げ、また、『野火』とポーの作品との詳細な比較研究を行い、『野火』におけるポーの受容の実態を明らかにしている。そして、ポーを手本にした理由については、戦争という異常な体験をリアルに描出し、「狂人の手記」であることを明かさずに過去の体験を現在進行のように見せることが狙いであったと結論づけている。

第三章は、『俘虜記』・『野火』とほぼ同時期に書かれた 17 編の短編戦争小説を考察の対象とし、そこに描かれ

た体験や作品の主題を分析している。この一連の短編戦争小説は、『俘虜記』とも『野火』とも異なって、フィリピンでの駐屯生活をも描いている。これらの短編戦争小説の主題は、三つにまとめられるとし、一つ目は戦場における兵士の心理と感覚の表現、二つ目は亡くなった僚友に対する見直し、三つ目は戦争に振り回された人間関係のありようや幸福の追求であるとする。つまり、一つの意図に沿って創作された『俘虜記』や『野火』とは異なり、短編戦争小説はさまざまな主題や書き方を試みる場としてあり、大岡の戦争体験を多様な視点で捉えた作品群であるとする。並行して書かれたこうした短編小説群が、『俘虜記』や『野火』の土台ともなっているとし、従来注目されることのほとんどなかった、この短編小説群の再評価を試みている。

そのように、本論文は、これらの三つの章において、それぞれに意図も創作方法も大きく異なる三つの系列の作品群を、ほぼ同時進行で書き続けることで、大岡の戦争文学が形作られていったことを明らかにしている。

第四章では、大岡が、この創作過程から獲得した主題と方法が、異なるジャンルの文学にどのように応用されていくのかを問うている。次の時期に、大岡は、数多くの短編推理・裁判小説を書いており、それを考察の対象としている。これらのうち、12 編がエリザベス・ヴィリヤース『謎の事件（*Riddle of Crime*）』の翻案または翻訳であり、未解決の事件を扱った作品が多いことを示し、その原作との詳細な比較研究を行っている。原作には多くの告白や遺言が現れるが、それを使いながら大岡が主張しているのは、遺言や告白というものが果たして信憑性の高いものだろうかという問いであり、それを証拠として有罪無罪を決定する裁判のあやうさである。そこには、大岡が戦争体験を通して獲得した認識が反映されていると論じている。

【論文審査の結果の要旨】

大岡の戦争小説は、発表当初から多くの注目を浴びたが、例えば『俘虜記』の場合、先行研究では、俘虜になるまでの経緯を描いた第一章への注目が多く、作品の全体像は十分に論じられてはこなかった。また、『俘虜記』・『野火』・短編戦争小説群は、同時期に並行して書かれたものでありながら、それらを俯瞰する形で、大岡の戦争小説が論じられることはほとんどなかった。本論文は、それを試み、十分説得力のある成果を上げており、高い評価に値する。特に第一章は、『俘虜記』連作の全体を、一連の思考の発展として説明しきった点で、すぐれた作品論となっている。その見解は、大岡が、戦場の体験より俘虜としての体験に重きを置いた理由を明らかにし、また、これ以後の大岡の作品に継続することになる大きなモチーフないし発想の起点を示した卓見と認められる。

第三章の短編戦争小説群については、従来ほとんど問題にされてこなかったものであり、本論文によって、その再評価の必要性が示されたといえる。さらに、第二章と第四章では、丹念な文献の調査と詳細な比較研究が、すぐれた成果を生んでいる。数多い注に書き留められた、細部の補足も充実している。

とはいえ、いくつか問題点も残している。まず、同時代の他の戦争小説にも言及しておく必要があっただろう。第二章については、大岡の独自のポー受容のあり方をより明確にしていければ、さらにすぐれた論考となるだろう。また、それを踏まえて、『野火』の新しい解釈にまで踏み込むことが期待される。第三章は、やや叙述の詳細を欠き、述べつくされていない部分を残している。さらに、本論文の考察の全体において、大岡の証言が多用されているが、その当否についての検討が必要と考えられる。

以上のような問題点は残しているものの、本論文が、大岡昇平の戦争小説の全体を視野に入れた立論である点、とりわけ『俘虜記』の全体像を示しえている点は高く評価できる。また、丹念な文献の調査と、詳細な比較研究は、本論文をすぐれた力作にしている。

よって、本論文を、博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。